

### 新宿というトポスに関する研究 一周縁性からのアプローチ

照井, 恒衛

---

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院 国際日本学インスティテュート専攻委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

国際日本学論叢 / 国際日本学論叢

(巻 / Volume)

6

(開始ページ / Start Page)

63

(終了ページ / End Page)

87

(発行年 / Year)

2009-03-18

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003954>

# 新宿というトポスに関する研究

— 周縁性からのアプローチ —

地理学専攻修士課程二年

照井恒衛

はじめに

私は「盛り場というトポス」で、盛り場とは「地理的周縁性」、「社会的・文化的周縁性」という特性を有した都市のトポス（場所）と規定した。

このような観点から、本稿では東京の最大の盛り場である新宿のケーススタディを行う。その中でも内藤新宿（現在の新宿二丁目）周辺と歌舞伎町を取り上げる。なぜ新宿を取り上げるのかというと、「江戸から明治にかけては都市の周縁に存在し、その後郊外電車のターミナル駅から東京の二大繁華街へと成長していった新宿と渋谷という街に

は「場末の空間」が存在して<sup>1)</sup>おり、新宿は地理的に見るならば、市街地と郊外の境界に位置し、まさしく周縁の地であったという歴史的事実があるからである。

本稿では現在の新宿というトポスを形成している都市的要素を地理的特性、社会・文化的特性の面からのアプローチをする。その際、歴史的な考察を試みる。新宿という土地の記憶をたどることによって、新宿という盛り場の特性を明らかにするのである。

## 第一章 新宿二丁目（内藤新宿）における周縁性

### 第一節 新宿二丁目（内藤新宿）の地理的周縁性

新宿を〈水〉という観点から考えると、かつて新宿二丁目（内藤新宿）周辺には玉川上水が流れていた。

広重の「名所江戸百景」にも描かれている「玉川堤の桜」は旅籠屋や茶屋の主人たちが堤の両側に客寄せのために植えたものだという。この桜は一八五六（安政三）年に植えられたもので、表立った理由は、桜の木が毒を消すと言われていたからであるが、実際は誘客にあったことと言うまでもない。この絵からは玉川上水の水辺沿いに遊女といった旅籠や茶屋が軒を連ねていることがうかがい知ることができる。

この玉川上水も大正末期には暗渠となってしまった。「玉川上水も土管で地下へ埋められ、暗渠になった。上水の埋没はそれのみに終わらない。同時に、夕方、ほつべたにぶつかるほど飛んでいた蝙蝠も、夏の夜、土手の草むらで無数に飛び交い、明滅していた螢の群れも、流れに泳ぐ小魚や源五郎やあめんぼも、さらには土手の土筆やはこべ、

## 新宿というトポスに関する研究

桜並木まで、いっぺんに消えていったのである<sup>3)</sup>。

また、この周辺には内藤新宿の太宗寺の〈池〉を水源とした「蟹川」も流れていた。このようにかつての新宿二丁目近辺は、今では想像もつかないかもしれないが、川や池といった〈水〉が豊富な生命の源泉の場所であったのである。この地理的特性が盛り場の周縁性を生むことになるのである。

つい先日、新宿区によって玉川上水の流れが復活するようになることが決まった。これにより新宿に〈土地の記憶〉である水と緑のネットワークが復活することになる。

## 第二節 新宿二丁目の社会的・文化的周縁性（文化環境）

### （1）宿場町としての内藤新宿と遊女

「宿」は網野善彦が指摘しているように、「遍歴する「芸能」民、「無縁」の人々の集住する場」で、「宿と遊女が切り離しがたい関係にあった<sup>4)</sup>」のである。

それまでの甲州道中（街道）は日本橋から最初の宿場町である高井戸宿との間が四里八丁と遠いために、一六九七（元禄一〇）年に浅草・阿部川町の名主・高松喜兵衛が同志四名（市左衛門、忠右衛門、嘉吉、五兵衛）とともに、伝馬町と高井戸町の負担を軽減させることと、五六〇〇両の運上金を出す条件で、太宗寺の南東に新駅（宿場）の開設を願いだした。翌年に許可されて、二年後の一六九九（元禄一二年）年四月に業務を開始した。

その際、内藤家や旗本から土地を払い下げて、宅地造成も行った。宿場の目的は幕府御用の貨客を運搬することにあった。宿場の運営、管理などは喜六らが行ったが、この費用を捻出するために、旅籠屋や茶屋を開いたのである。

つまり、宿場は旅籠屋や茶屋から役銭を納めさせていたのである。そして、茶屋などの存在により、旅人のみならず、近くに住む人々も内藤新宿に遊びに来るようになった。

杉並・堀之内の妙法寺を参詣した人の多くが、内藤新宿に寄って遊んでいた様子が「妙法をかく新宿の昼遊び」「お帰りは御祖師様だと女房いい」「新宿に泊まるはこれ妙法寺」「新宿を売るは他宗の堀之内」といった川柳からうかがえる。このように妙法寺の信者は内藤新宿の町の発展に寄与したのである。

そして、元禄、宝永、正徳、享保年間と内藤新宿は繁栄を極めていった。しかし二〇年後の、一七一八（享保三）年には享保の改革の風俗取締や「大八事件」や飯盛女が強引に客を引き入れたり、吉原が岡場所や宿場町の私娼取締を要請するなどして、一旦宿場は廃止となった。

つまり、新宿が「宿場町」というより「遊興の町」と化していた実態が幕府において問題となった結果、開設後わずか二〇年にして廃止となったのである。「全国の街道筋に二〇〇以上あつた宿場で、遊女商売をいましめるために、幕府は開宿二〇年で、一番歴史の浅い内藤新宿をみせしめのため、廃宿にした」のである。

当時の新宿は北の吉原、南の品川を凌ぐ繁盛ぶりだった。その後、再三にわたる再興願いにより、その五四年後の一七七二（明和九）年に復活することになった。それと同時に旅籠屋と茶屋も再開し、飯盛女は一五〇人置くことが許可された。千住、板橋は新宿と同数で、品川が五〇〇人と最多だった。再開当時は遊里の数は二三軒で、この後増加していくことになった。

このように「高松らの本當の狙いは、宿場の設置に名を借りて、新宿の地に品川宿などのような一大行楽地、繁華街を作り出すことだった」のである。そして、高松は江戸の盛り場・浅草の商人であったので「新宿を宿場町として

開発するにあたり、浅草寺周辺の盛り場をモデルにした」といわれる。

つまり、「浅草商人は、伝馬町や高井戸宿の負担軽減と言う大義名分のもとに、じつは江戸近郊に一大遊興地を創って、利益を得ることを図った」のである。

広重が描いた「四谷内藤新宿」は「四谷新宿馬糞の中であやめ咲くとはしほらしい」という節回しに由来する。ここで言うあやめ咲くとは、内藤新宿名物の茶屋娘のことで、ここがいかにも遊女たちによつて盛っていたことが窺える。つまり、ここには宿につきものの「飯盛女」や「足洗い女」といった遊女がいた。「旅籠屋は、一軒につき二人まで「食売女」を置くことを許されていた。幕府は宿場に遊女をおくことは禁止していたが、その一方、旅客に給仕する女性として食売女（飯盛女）を置くことは容認していた。幕府は食売女とは遊女ではないという公式見解を取っていたのであるが、実際は遊女にほかならなかった」のである。

「飯盛女」は俗称であつて、公的には「食売女」であり、宿泊者の食事の賄いをする女のことである。しかし、実際は遊女という売春婦であつた実態から一般には「飯盛女」と呼ばれていた。その平均年齢は二〇歳そこそこだといわれている。

そして、幕府公認の遊女は公娼と呼ばれていたが、岡場所などの遊女は私娼と呼ばれていた。新宿の「宿場」としての性格は、明治、大正、昭和、平成を経た現在でも引き継がれているといえよう。

## (2) 寺社の社会的・文化的周縁性

寺社という観点からは新宿二丁目周辺（内藤新宿）には太宗寺、成覚寺、天竜寺、正受院などの寺院や内藤新宿の総鎮守として多くの人々の信仰を集めていた花園神社がある。

飯盛女たちの共同墓があつたのが成覚寺で、過酷な勤めにより、病氣や心中などで亡くなると米俵にくくまれてこの寺に投げ込まれたといわれている。そのため、「投げ込み寺」と呼ばれていた。内藤新宿の悲しい歴史を物語る寺で、ここには旭地蔵がある。これは遊女と客が適わぬ恋を嘆いて、玉川上水に身を投げた男女一八名の戒名が刻まれている。子供合埋碑も供養塔で、子供と呼ばれた遊女一六〇〇人ほどを供養したもので幕末につくられた。ここでの子どもとは飯盛女のことであり、抱え主にとって、彼女らは子どもであつた。そのほとんどは一九歳から二四歳であつたという。

成覚寺の境内には白糸塚がある。この塚は内藤新宿の一九歳の遊女・白糸と侍の鈴木主水という悲話に関係して建てられた。この話は芝居などで世に広まつた。

正受院にも脱衣婆がおり「綿ばあさん」と呼ばれ親しまれていた。ここは願い事を何でも叶えるということで評判が評判を呼び、盛況を見せたと言われる。しかし、「これは宿場の旅籠（遊女）屋と寺とが結託して、客寄せのために仕組んだたくらみだともいわれた」。

地形的にはこの付近は、前述したように、現在はなくなつてしまつた「蟹川」という川の水源でもあり、ここから歌舞伎町方面に水が流れていた。太宗寺の境内にもかつては湧き水が湧いていた、大きくてきれいな池があつたが、都市化の波を受けて、枯れてしまつた。このように、新宿二丁目（内藤新宿）周辺も後述する歌舞伎町と同様、〈水〉の豊かな水源地なのである。

また、太宗寺には道中の安全を祈願して建立された江戸六地蔵の一つの金銅仏がある。さらに、「内藤新宿のお閻魔さん」「しょうづかのばあさん」として親しまれた閻魔大王と奪衣婆の像は江戸の庶民の信仰を集めた。そのため、

## 新宿というトポスに関する研究

奪衣婆は、閻魔大王に仕え、三途の川を渡る亡者から衣服をはぎとり罪の軽重を計る。像の右手にははぎとった衣服が握られている。このように、衣をはぐことから、内藤新宿の妓楼の商売神として信仰を集めた。閻魔堂の御開帳もあるなど、太宗寺を訪れる人も多く、門前町も栄え、大変賑わったといわれている。ここには新宿で最初に誕生した新宿館という映画館もあった。

そして、何よりも太宗寺は縁日の寺として江戸の頃より有名であった。毎月一、一五、二八日に縁日が催された。また、正月と盆には境内に様々な見世物がでた。小屋がけの活動写真、奇術、サーカス、猿芝居、玉乗りなどである。このようにかつてはこの太宗寺が新宿の集客に大いに貢献していたのである。

また、天竜寺は「江戸名所図絵」には「追分より南の方、甲州街道の左にあり、済家の禅窟にして、本尊千手観音。開山は春屋和尚な」とあり、徳川二大將軍秀忠の生母西郷局のために開き、この地に門前町を開いた草分けの禅寺である。

新宿御苑の水源地にほど近い、ここ天竜寺の裏は台がら屋など「寺社につきものの乞食たちがずっと住んでいた一角」<sup>10</sup>のスラム街であった。「台がらとは食べ残しのことである。遊郭の客や妓が、前夜食べ残した台の物(料理)を、翌朝早く、遊郭を廻って拾い集めるのが台がら屋で、いわば残飯整理で、乞食がやっている仕事だった」<sup>11</sup>明治二〇年、警視庁が布達した「宿屋営業取締規則」によって、南町は木質宿営業地域、つまり細民街に指定された。そして、ここには遊郭関係者、芸人、流しの門付けなどの周縁の人々が住み着くようになった。

芸人たちが暮らす町はこの他に、横山源之助の「日本の下層社会」に登場する四谷鮫河橋の一角にあった。歌舞伎役者たちも「河原者」と呼ばれて蔑視されていたので、このような芸人たちが集まるスラム街に住んでいた。そし



て、江戸の嘉永年間には竜童寺の門前に宮地芝居として、一力亭という芝居小屋があり活況を呈した。坂東勘九郎演じる熊谷が大変評判を呼んだという。

(3) 新宿二丁目と「歓楽街的盛り場」

明治新政府は一八七二（明治五）年一〇月二日に「人身売買禁止」と「娼妓解放」を太政官布告として出した。遊女たちは解放されたものの行き場所も仕事がない。

東京府は旅籠屋に場所を限定して「貸座敷」という遊女屋を認めた。当時、遊女商売が認められた場所は吉原遊郭、内藤新宿、品川、板橋、千住、根津だけであった。

翌一八七三（明治六）年になると、貸座敷渡世規則により、旅籠屋の多くは貸座敷として開業した。こうして公娼制度が確立したのであった。「東京府は、遊女商売を希望する樓主、娼妓に願いを提出させ、審査の上、鑑札を与え、鑑札料を取り立てて保護、管理する一方、許可地以外の遊女屋や娼妓は厳しく取り締まり、新生東京の風紀を護ろうとした」のである。

貸座敷申請書は、ほとんど寺院の人であった。つまり、寺院が保証人、名義人となっていたのである。新宿では正受院が申請している。一八七五（明治八）年には三七軒の貸座敷があり、娼妓は二〇〇人近くいた。

そして、一九一八（大正七）年三月に街道沿いから新宿の遊女屋（貸座敷）が、警視庁の命令により牛屋の原（現在の二丁目）という原っぱに移された。牛屋の原はもともと耕牧舎という乳牛の牧場で、明治二年から大正二年まで作家の芥川龍之介の実父の新原敏三が経営していた。

その結果、大木戸から追分にかけて点在していた五三件の貸座敷が期限内に牛屋の原に引っ越した。こうして、新

宿二丁目に一大歓楽街（新宿遊郭）が誕生したのである。

第二次大戦後、旧遊郭街は「赤線」と呼ばれた公認の売春地帯に指定され、風俗営業法の許可を受けた特殊飲食店（カフェー）として、一九五八（昭和三三）年の売春防止法成立時までその灯をともしてきた。最盛期には一〇〇軒のカフェーが営業した。警視庁は一九四六（昭和二一）年一月に、東京都内の集娼地域の指定をし、その際、赤線で囲んで営業を許可した。新宿二丁目の遊郭もこの時指定され、風俗営業の許可を警視庁からとった公認の私娼地域となった。

また、現在のゴールデン街の新宿三光町周辺や花園歓楽街、歌舞伎小路、新天地、歌舞伎新町、新宿二丁目小町通りなどは非合法売春地帯の「青線」と呼ばれており、ここで売春行為に及んだ人は八〇〇人を超えていた。青線は食品衛生法の許可しかとっていないので、普通の飲食店で売春行為が行われていた。後に青線にも風俗営業の許可が下り、赤線化していった。料金は赤線より安かったこの頃、新宿で三〇〇〇人ほどの売春婦がいたと言われている。

しかし、一九五八（昭和三三）年四月に売春防止法が施行され、新宿二丁目の遊郭は、旅館、喫茶店などに変わっていくことになった。その後、ヌードスタジオが新宿二丁目で大ブームとなり、最盛期には三七軒のヌードスタジオがあった。

このように新宿二丁目は今でこそゲイのメッカ（ゲイタウン）として知られているが、もともと、戦前は「遊郭」、戦後は「赤線」の代名詞であり、江戸時代には内藤新宿という甲州街道の宿場町を起源としていたのである。さらに、この後、赤線の灯は売春防止法施行後、歌舞伎町に移っていくことになり、歌舞伎町が「性風俗の街」となったのである。

## (4) ゲイタウンとしての「二丁目」

そして、現在はゲイタウンとして「新宿二丁目」は知られている。ゲイタウンとしての新宿二丁目の歴史は一九六〇年代半ばから始まる。一九五八（昭和三二）年の売春防止法施行以降、空き家となった元赤線の店をゲイバーとして使ったのが、始まりと言われている。一九六九（昭和四四）年に公開された「薔薇の葬列」（松本俊夫監督）には、当時の新宿二丁目のゲイボーイの世界が描かれている。主人公の美少年をピーターが演じた。

このように「新宿二丁目」は現在「ゲイタウン」として周縁文化が成立しているが、そのベースにはこの〈土地の記憶〉がある。「地理的周縁性」として、玉川上水、太宗寺の池、蟹川など現在は消えてしまった〈水〉の文化がある。〈水〉というのは盛り場成立には欠かせない要件である。また、「社会・文化的周縁性」としては、内藤新宿の〈宿〉性や太宗寺、天竜寺などの寺院の存在も重要である。歓楽街的な盛り場は現在でも神社の周辺に立地するのである。そして、その周辺にスラム街が形成されるのである。

一九八〇年代から九〇年代はゲイブームが起き、テレビや映画などのメディアで盛んに「新宿二丁目」が取り上げられるようになった。これは偶然なのだろうが、江戸時代の芝居町で陰間茶屋があった場所も「二丁目」と呼ばれていた。

## 第二章 盛り場・歌舞伎町の周縁性

本章では新宿の代表的な歓楽街である歌舞伎町を例にして、その「地理的周縁性」と「社会的・文化的周縁性」に

## 新宿というトポスに関する研究

ついで歴史的アプローチを試みる。周縁性は〈土地の記憶〉と密接な関係にある。

### 第一節 歌舞伎町の地理的周縁性

(1) 歌舞伎町の原風景(自然環境) 〈水〉の風景・池と川と湿地帯  
 まず新宿・歌舞伎町の(土地の記憶)ともいふべき原風景について地理的考察を加えることにする。現在の歌舞伎町付近(かつての角筈一丁目北町)は、大久保という地名の由来にもみられるように、窪地の湿地帯で谷底の町であった。また、江戸幕府の訓練場である野場のような場所で、そのため地名も野場と称していた。明治以降は肥前藩主・大村子爵の別邸となり、後藤新平も鴨猟を行った鴨場もあり「大村の森」と呼ばれていた。このように歌舞伎町の中心部の原風景は鬱蒼とした森林で、真ん中に沼があったのである。

紀伊國屋書店の創業者である田辺茂一は「わが町・新宿」の中で「二歳のころ、小僧の背にのって、大村の山にわけ入ったことがある。この大村の山は、現在の歌舞伎町一帯だが、そのころは、鬱蒼とした大木が茂っていて、山鳥や山犬がいた<sup>13)</sup>と述べている。

このように、明治三〇年代まではここに中島をもった大きな鴨池があり、この池の畔には弁天様が祀ってあったのである。現在でも「歌舞伎町弁天」としてかつての沼地の中心地であったビルの谷間の公園に祀られている。このように、現在の歌舞伎町一帯の原風景の地形は大きな池のある広大な湿地帯だったのである。これは江戸時代の歌舞伎町、つまり芝居町であった葎町と共通する。なぜなら、葎町も、芝居町が形成される前は、ヨシが群生する湿地帯であったからである。

また、かつて「蟹川」という川も流れており、その川の水源もこの付近にあったと言われている。「歌舞伎町」も「新宿二丁目」と同様、水豊かな生命の再生の場所であったのである。現在の西武新宿駅北口の二丁目と二丁目の境（大久保病院付近）にあった湧水池が水源となつて、「蟹川」という一本の川が明治通り方面を経由して、新宿文化センターの先で太宗寺境内の池からの流れと合流して、戸山村を抜けて、神田川に合流していたのだ。

歌舞伎町一丁目と二丁目とを分ける「花道通り」は谷底に位置しており、かつて「蟹川」が流れていたところである（現在は暗渠）。この川を境に歌舞伎町の歓楽街的は一変する。一丁目は歌舞伎町の歓楽的中心で、この川の向こうの二丁目は標高も少し高くなつており後背地として、ラブホテルなどがある地区となつている。つまり、歌舞伎町一丁目はかつて池もあつたような低地の湿地帯であり、社会的・文化的周縁性が高いエリアなのである。

野村敏雄の『新宿っ子夜話』にも次のような記述がある。「当時は山林や竹藪、沼や畑や小川が流れる野地だった。沼や低地は神社側の高地を崩したり、淀橋浄水場の建設工事で掘り取った残土で埋立て<sup>(4)</sup>」たのである。このように、明治の末に森の木は切られ、また、一八九三年の淀橋浄水場建設の際の残土で、池も埋め立てられた。

つまり、沼地を淀橋浄水場建設の際に出た土を使って埋め立てて、現在の歌舞伎町は作られたのである。そして、鴨池は府立第五高等女学校を経て、現在の「コマ劇場」へと変化していくことになる。

このように、地図により地形を読み取ると明らかのように、新宿・歌舞伎町は盛り場成立の原則である、〈水（川と池）〉と〈森〉という自然環境を持った盛り場なのである。

(2) 十二社周辺の原風景（自然環境） 〈池と滝と森〉

現在の西新宿一帯の地形も歌舞伎町同様に湿地帯であった。これらは縄文海進期の海のなごりなのである。「江戸

時代は熊野十二社という名称で呼ばれていたが、単に角筈村の鎮守であるだけでなく、境内の広大な池や滝、そして鎮守の森と一体となって風光明媚な景観を作り上げていた。当時人気のあった江戸の名所であり、歌川広重も「名所江戸百景」でその様子を描いている。特に熊野十二社の池は船遊びを楽しむ人々で昭和初期まで賑わった<sup>15)</sup>。

「十二社の森の奥の池には、美しい娘が変じた大蛇が住んでいると考えられていた。女性のエロチシズムと水と蛇が結びついて、新宿定礎の秘密を語っていた。こんにちの新宿のたましいの中心ともいえる歌舞伎町も、水や蛇や女性のエロチシズムと深い結びつきを保っている」<sup>16)</sup>のである。

しかし、熊野の滝は明治時代半ばになくなり、十二社の池も昭和に入ると、浄水場の建設のため、少しずつ埋め立てられ、一九六八（昭和四三）年には完全にその姿を消してしまい、池ともに、花街も消え去ってしまったのである。

## 第二節 歌舞伎町の社会・文化的周縁性（文化環境）

### （1）歌舞伎町と神社

なぜ、歌舞伎町の考察に十二社を取り上げるのかというと、十二社熊野神社の氏子の範囲は西新宿ならびに歌舞伎町までを含む広い範囲となっており、歌舞伎町ととても関係が深いからである。現在では新宿駅があるので、駅で分断されている印象があるが、もともとは新宿区役所付近が花園神社と氏子の範囲の境界となっている。なぜなら、かつての東京の市内と市外との境界がこの付近であったためである。内藤新宿を中心とする市内は花園神社の範囲で、それより西は十二社熊野神社の範囲だったのである。因みに歌舞伎町の真ん中にある新宿コマ劇場も熊野神社の氏子である。このように、十二社と歌舞伎町とは密接なつながりがあるのである。

熊野神社は、現在の新宿中央公園内にあり、熊野三山の祭神を合祀している。室町時代に中野一帯を開拓した鈴木九郎が熊野三山十二所権現を分けて祀ったのが始まりとされている。十二社の地名は、熊野三山以下十二社が祀られていたことに由来する。

そして、江戸時代には熊野権現社と呼ばれ、八代將軍吉宗も鷹狩りの際に、参拝している。その頃、御開帳も開催され、観世音や靈仏、靈宝が開帳された。この御開帳は新宿の町に大きな経済効果をもたらした。「十二社から見れば、すぐ東隣の新宿が江戸近郊の行楽地・繁華街として繁昌していたことは、参詣者の集客にプラスに働いたわけだが、一方の新宿側から見ると、十二社の存在は、新宿の町を江戸近郊の行楽地・繁華街として繁栄させた要素の一つであった<sup>15)</sup>」。そして、明治維新後に、熊野権現社は熊野神社と改称された。

一方、花園神社は新宿の総鎮守として多くの人々の信仰を集めていた新宿にとって重要な宗教的な場所である。今から四〇〇年ほど前に創建されたと言われており、内藤新宿に宿場町ができる前から、この場所にあったのである。そして、花園神社の西隣には本多の池があった。こども、〈水辺〉に接していたのである。つまり、戦後の青線地帯もかつては〈池〉の底であったのである。

## (2) 神社と芸能

十二社・熊野神社も役者ゆかりの神社である。安永二(一七七三)年に、当時の若手歌舞伎役者吾妻富五郎と大谷谷次が奉納した大絵馬が掲げられている。これには市村座の七人の人気役者が描かれている。また、同じく市村座の市村羽左右衛門が奉納した「式三番奉納額」もある。これは、十一月の顔見世興行や正月の初春興行の様子を描いたものである。そして、度々役者が十二社で女遊びをした際ここに寄ったらしい。

花園神社は安永九（一七八〇）年と文化八（一八一二）年の大火で焼失した社殿を再建するため、境内に見世物小屋や水茶屋、揚弓場を設けて、見世物や芝居、踊り、浄瑠璃、操り人形、物真似などの芸能を興行し、大変賑わっていたらしい。そのため「三光院芝居」の名が江戸中に知れ渡っていたのだ。このように花園神社は芸能にゆかりの深い神社である。現在も境内には「芸能浅間神社」があり、芸能関係者の奉納も多い。

また、「かつて神社仏閣は、地域社会のまつりごとの中心地でした。政治、経済、文化、芸能が一体となって、境内の中にありました。たとえば商人は、各地を移動する「流れ者」です。流れ移動するからこそ、産地で安く仕入れたものを、都市で高く売る、という価格差が商売になる。あるいは人形師、見世物、香具師など、境内は移動する者たちの立ち止まる場所だったのです。地元コミュニティに含まれない者が、ひととき滞留して、銭を稼ぎ出す場所として利用されてきました。それが地域社会と外界との境目である神社仏閣の境内―まさに「際」「境」にある空間の役割だったのです」と述べている。まさしく本稿が問題としている近世までは周縁性が発揮される場所であったのである。

このように花園神社は古来より、大変賑わっていた。その様子を伝える記述があるので紹介する。「内藤新宿の花園稲荷社（現、新宿花園神社）境内で、舞台や花道、棧敷など、三座と同じような本格的な機構をもった歌舞伎芝居が興行されていて、自分たちの「家業」の差し障りとなっている。元来、寺社境内での芝居は香具や菓を売り広めるための人寄せとして行うもので、小屋の作りも葦簀張りで手軽にするものである。そのうえ、花園神社境内での芝居には、三座のそれぞれと出演契約の証文を交わした抱えの役者が、大勢座元への通知もなしに召し抱えられている。さらに河原崎座の手代で藤七という者が境内での芝居の世話をしていた。これは心得がたいことである」<sup>19)</sup>。このよう



に三座の役者が出演するほどに花園神社における宮地芝居は盛っていたのである。

そもそも神社は古来から芸能と深い結びつきをもっており、かつてはこの神社でも、祭りのときには芝居小屋や見世物小屋が出現していたのである。

つまり、花園神社境内における芝居や踊りの興行から、新宿と芸能との関係が始まったと考えられる。そして、この江戸の〈演劇性〉は唐十郎、寺山修司らに引き継がれ、現在では花園神社において劇団唐組や上々颱風なども公演を行っている。上々颱風のリーダーの紅龍さんは次のように述べる。「近くに歌舞伎町・ゴールデン街もある雑多な街で、神社を借景に舞台にできる。普通の劇場ではあり得ない不思議な空間だ」<sup>(20)</sup>。

歴史を遡ると、一九六七（昭和四二）年八月に唐十郎や磨赤児らの状況劇場が「腰巻お仙・義理人情いろはにほへと篇」という題名で河原乞食よろしくと花園神社境内で紅テントを張り、テント公演を行った。実際には神社に議員の選挙事務所があつて、腰巻が月笛に変わってしまったというエピソードもある。公演チラシには「演劇史上初のテント劇場、新宿花園神社に出現す」という文字が躍っていた。真つ赤なテントで作られた芝居小屋は連日満員になった。「紅テント（状況劇場）のような都市的演劇は、都市の内奥をさまざまなレベルにおいて反映した演劇を定義することができ。舞台上のものや状況は、すでに捨て去られたものや日常の生活において機能的地位を失ったものの寄せ集めの観を呈している」<sup>(21)</sup>のである。

唐はその当時のことを「年配の宮司さんが親切に話を聞いてくれました。ちょっと信じられなかったですね。お祭りの時は境内に見世物小屋も出ましたから、その一連のものと見られたんじゃないかな」<sup>(22)</sup>と回想している。初日には準備の最中に、お客さんが八〇人ほど来ていたという。唐は新宿の寺社を一軒一軒周り、上演の許可を求めたが、花

## 新宿というトボスに関する研究

園神社だけがテント公演を許可してくれたのだと言う。このように、唐は街そのものを芝居の中に巻き込んでいった。このようにアングラ芝居は花園神社で生まれたのである。

しかし、やがて東京都と地元商店街による新宿浄化運動によって、〈周縁性〉を有した唐の状況劇場は花園神社を追われることになる。この時の状況について唐は『日本列島南下運動の黙示録』の中で「六八年の秋から新宿という町は、商人とコンクリートの町として、急に色めきだち、新宿を明るくする会という平和な団体まででき、花園神社の紅テントは、町の旦那衆の訴えで、そこから追われてしまった」と書いてある。

こうして、唐は歌舞伎町からその舞台をかつての十二社の池の近くの新宿中央公園へと移動するのである。そこで機動隊に囲まれながら、芝居を打ったのである。唐はかつての〈周縁〉の臭いをこの場所に嗅ぎつけていたのだろう。

## (3) 道徳的繁華街としての歌舞伎町

歌舞伎町も戦前までは角筈という地名で、付近には都立大久保病院や府立第五高等女学校ぐらいいしかな静かな住宅地であり、商店もほとんどない新宿の場末であった。

ここが戦争で焼け野原となり、当時角筈一丁目北町の町会長であった鈴木喜兵衛は一九四五年一〇月に旧住民を集めて、「復興協力会」を組織した。戦後、復興協力会の設立総会の会長職にあった彼は、今の歌舞伎町に銀座と浅草の両方の良さを取り入れ、家族連れが遊びに来れるような、健全な道徳的繁華街（一大娯楽センター＝ファミリーズメントセンター）の建設を計画した。それはまさしく「第三空間」的な発想から、新東京の健全な家庭センターを作るというものであり、そこには戦後の産業の中心は観光という考えが根底にあった。

この時、喜兵衛に協力したのは、角筈の大地主・峯島茂兵衛と東京都都市計画局長の石川栄権である。峯島は鈴木

の計画に協力し、自らの所有地の実に八割以上を手放したのだ。

計画によると区画整理をし、劇場・映画館、ダンスホール、演芸場などを核とし、その周りに店舗兼住宅をつくるという革新的なものであった。この計画は建築家で東京都計画局都市計画課長であった石川栄権の広場を芸能館で囲むという盛り場論とも合致するのである。石川は鈴木<sup>24</sup>の計画を実際の図面におこしたり、土地の権利関係の整理などを行った。一九四七年には戦後の民間による区画整理第一号として新宿第一土地区画整理組合を発足させ、土地区画整理事業に着手し、一九五七年五月に事業が完了した。このように歌舞伎町の開発は民間組合主導で行われたのである。

そして、「新しい文化地域にふさわしい町名にしよう」という機運が盛り上がり、菊座という歌舞伎座を誘致して戦後の新宿の文化拠点たれという願いから、一九四八（昭和二三）年四月一日に「歌舞伎町」と名付けられたのである。

中沢新一はこの点について「銀座の歌舞伎座もいけれど、もともと歌舞伎は湿地を住処にするような人々によって、守り育てられてきた芸能ではないか。銀座の歌舞伎には、もうそういう湿地に生まれた芸能としての生命は失われて、乾燥した高台に住む上品な人々のための、お上品な芝居になり果ててしまっていた。歌舞伎を乾いた土地から、湿った土地へ取り戻そう。それは、歌舞伎という芸能にとっても、生命復活のきっかけをもたらすにちがいない。こうして、「新宿歌舞伎座」計画は、にぎやかな音頭とともに、この沼地にできつつあった盛り場の人々の心を、大いに浮き立たせた<sup>25</sup>」のである。

そして、歌舞伎町が誕生した一九四八（昭和二三）年には歌舞伎町復興祭が行なわれ、同年地球座という映画館が

## 新宿というトポスに関する研究

オーブンした。こうして一九五〇（昭和二五）年には、東京都などの後援を得て、歌舞伎町と新宿御苑と西口広場を会場として東京文化産業平和博覧会が六月末まで開催されることになった。第一会場は歌舞伎町、第二会場は新宿御苑、第三会場は新宿西口であった。そして、博覧会のパビリオンには、産業館、社会教育館、婦人館、合理生活館、児童館、野外劇場等があった。

しかし、さっぱり客が入らずに、博覧会は六、八〇〇万円の赤字を出して大失敗に終わった。この時の負債処理のために、当時資金力のあった台湾人華僑や在日朝鮮人に土地を売却した。そのため、現在でも歌舞伎町は彼らの存在抜きには語れないのである。つまり、現在の多文化化した源流がここにあったのである。

当時のパビリオンはレジャー施設に転用され、今日の歌舞伎町の原形となった。具体的には、産業館跡はスケートリンク（東京スケートリンク）に、そして現在はミラノ座となっている社会教育館跡（二号館）はグラランド・オデオン座に、合理生活館跡は東亜会館に、児童館跡には東宝が一九五六（昭和三一）年にコマ劇場（当初は映画館）をオープンさせ現在でも演歌、舞台やミュージカルの公演に使われ、たくさんの方が訪れている。

そして、地理的にみるならば、コマ劇場のある場所は鴨池で、カモ池の跡地がコマ劇場と化したのである。

このように「民間主導の、東京では戦後初の博覧会は、（莫大な赤字を出しながらも）歌舞伎町の発展の実質的な基礎をかたちづくって」<sup>(23)</sup> いったのである。

しかし、金融措置令や建築制限令などが発令されるなどして、建築基準がクリアできなかったことや建設労働者に支払う賃金もままならないなど、鈴木 of の思い通りに事は運ばなかった。そこで東宝の小林一三や東急の五島慶太に歌舞伎町の都市計画について相談した。また、歌舞伎座も中村吉右衛門後援会が乗り気になっていたが、第二次建築制

限が解けず計画は頓挫してしまった。

また、菊座もオーナーである松竹の大谷武次郎会長が乗り気でなかったことや松竹の財政問題のために、実現しなかった。この背景には財政問題の他に、当時、新宿の歌舞伎町が銀座の木挽町に比べて格下に見られていたという面もある。

このように鈴木喜兵衛が思い描いた「道徳的繁華街」としての歌舞伎町は、残念ながらいつい実現されることはなかったのである。

しかし、中沢は別の理由を指摘した。「いったん乾燥地に慣れ親しんでしまった歌舞伎関係者には、なにも好き好んで、はじめじめした沼地を埋め立ててつくられた、いささかいかかわしい新興盛り場に舞い戻って、湿地生まれの芸能という、自分の過去の素性に回帰することもなかるう、と思われていたのではなかるうか。いやしい芸能は湿地を出て、乾いた土地で芸術として成り上がればよい、というわけだ<sup>26)</sup>。私もこの中沢の指摘は大変的を射ていると思う。そして、歌舞伎町の発展に伴い、地価の上昇を見こした在日本朝鮮、韓国、中国人の人々が土地を買い占めたのである。彼らは映画に注目して、その土地に映画館を建てたのである。

新宿ムーランルージュを再建した台湾人華僑の林以文は、当初から歌舞伎町計画に参画した。「区画整理が進行中だった歌舞伎町に目をつけ、誰も見向きもしなかった焼け野原の土地を買い占め、華僑の仲間にも歌舞伎町の将来について説いてまわっていた<sup>27)</sup>」のである。そのため、現在でも在日韓国・朝鮮人や台湾人などの多くの人々がここ歌舞伎町で事業を展開しているのである。つまり、この時すでに歌舞伎町の多文化化した社会的周縁性は見られたことになる。

## 新宿というトボスに関する研究

(5) エスニックタウン・歌舞伎町く歌舞伎町のマージナル・マン

前述した通り歌舞伎町は、もともと在日中国・台湾・韓国人の人たちが中心となって作り上げられた町で、「社会的周縁性」の非常に高い街である。復興事業の中心には在日韓国、中国、台湾の人々がおろ、風林会館やジョイバツクビルなどは在日華僑の人たちが建てた。この歌舞伎町は近年ますます多文化の様相を呈し、後背地である大久保などはコリアンタウンと呼ばれ、エスニックな地域となっている。また、大久保には歌舞伎町で働く人たちが多数居住しており、職安通りに沿って、九〇年代に韓国人経営のショップが集中している。つまり、大久保は歌舞伎町のベツドタウンとしての性格があるのである。また、百人町のホテル街の経営者も在日韓国・朝鮮人の人々が多い。

韓国人が経営するチューイングガムのロッテの本社や工場もここ大久保に作られた。また、中央線の新宿駅から大久保駅にかけての線路沿いにはかつて在日朝鮮人の人々の集落があった。このように、歌舞伎町の後背地である大久保がエスニックタウン化する素地がこの頃から見られたのである。

そして、現在、約三万人と人口の一割を占め、都内でも最大の外国人登録者数を誇る新宿区であるが、その国籍構成も一〇〇カ国以上に及んでいる。全体の四二・五%を韓国又は朝鮮籍の人々が占め、次いで中国が三一・七%となっている。オールドカマーとしては韓国・朝鮮籍の人々が多い。地区としては大久保、百人町、歌舞伎町、北新宿に外国人が多い。大久保地区の不動産業者によると、「一五年前から客層の九九%は外国人となった。かれらは歌舞伎町や大久保で働く韓国人、中国人、フィリピン人、タイ人、マレー人などだ。新宿では日本人クラブはほとんど壊滅した。クラブで働いていた日本人はスナツクやカラオケを経営している。替わってクラブで働くのは外国人たち<sup>23</sup>」なのである。

## おわりに

現代社会においては、都市を生み出す源泉であった歴史的意味、自然的意味、社会・文化的意味などと無縁のイメージによる都市空間が増殖している。

田中優子が「時の移ろいに身をまかせ、時代の人が寄り集う。管理社会ならなおのこと。体と魂の力を抜いて、エロチックなことや、水のことや火のことや、生のことや死のことや、向こう側の世界のことを考える場所が必要となる。河と河原がマザーなら、それは壊してならない「場所」だった。しかし、もう、そんな場所は日本のどこにもない」と述べているように、地理的周縁性にとって、重要な〈水〉が次々と失われてきているのが、現代都市社会の姿なのである。〈水〉とともに、社会的周縁を形成する〈マーシナルマン〉たちや、彼らが担ってきた周縁的な〈文化〉も消え去ってしまったのである。

つまり、現代においては都市における〈境界〉や〈あいまいさ〉を失ってしまったのである。境界の喪失により、非日常性も希薄となり、都市において日常性が支配的になってしまったのである。

それは新宿・歌舞伎町も同様である。バブル期には大歓楽街となった歌舞伎町は街の安全や治安の問題がクローズアップしてきた。一九八四（昭和五九）年には歌舞伎町環境浄化町民総決起大会が開催され、風俗産業追放運動が展開された。

そして、現在では女性が男性と遊ぶ「ホストクラブ」が歌舞伎町において急激に増加してきている。これこそはジ

エンターの変容が如実に表れた現象であろう。

時代は平成となった一九九四（平成六）年には歌舞伎町環境浄化パトロールが開始された。そして石原都政において警察庁出身の竹花副知事の下、「歌舞伎町浄化作戦」が展開され、大規模な摘発が行われ、歌舞伎町浄化作戦が本格化した。歌舞伎町は犯罪の発生件数も多く、安全面で課題がある。そのため、新宿区は歌舞伎町を「新宿区民の安全・安心に関する推進条例」の重点地区に指定したのである。

二〇〇五（平成一七）年一月には「歌舞伎町ルネッサンス推進協議会」が発足し、また、同年新宿繁華街犯罪組織排除協議会総会が開催された。これらは大規模な歌舞伎町再開発と暴力団追放の流れである。街には「歌舞伎町ルネッサンス憲章」と書かれた看板が溢れて、歌舞伎町の創始者である鈴木喜兵衛の描いた理想的な街づくり（道徳的繁華街）を目指している。

そして、一九五六年の開館以来、「歌舞伎町」のシンボルとして親しまれてきた「新宿コマ劇場」が老朽化と業績不振により、昨年（二〇〇八年）末で閉館することになった。今後は東宝の支援による再開発が進む。この再開発に關して新宿区の中山区長は「歌舞伎町ルネッサンスの趣旨に添った開発を条件として出している」と語った。区長は風俗に頼らず、犯罪インフラを除去した健全な街である「エンターテイメントランド歌舞伎町」、「エンターテイメントシティ歌舞伎町」という都市空間を目指している。

しかし、「健全な歓楽街」というのは存在するのだろうか？ 歓楽街というのはそもそも不健全な場所であり、だからこそ人々が集まってくるのである。

このように歌舞伎町は今変わるうとしてしている。歌舞伎町という歓楽街が有している周縁性はどうなってしまうのだ



だろうか？ もともと歌舞伎町は地理的にみるならば、〈池〉を中心とした湿地帯という「地理的周縁性」を有した場所である。

ゴールデン街の女店主は次のように述べる。「なにがクリーンか。悪場所というのは、暗くて怖くて人間の匂いにする汚いところと決まっているんだ。こういうところで酒の飲み方を教わり、私も、けんじも、いろんな映画屋たちもみんな大人になった。新宿をシンガポールみたいにこざれいにして、いったいどうしようっていうんだろ<sup>(10)</sup>」。この言葉にすべてが込められているのではなからうか。

## 文献

- (1) 河野秀樹「周縁を呑みこんだ都市」学芸社、二〇〇二年、三二二ページ。
- (2) 野村敏雄「新宿うらまちおもてまち」朝日新聞社、一九九三年、一〇ページ。
- (3) 網野善彦「無縁・公界・楽」平凡社、一九九六年、一三九ページ。
- (4) 高橋和雄「遊興のまち新宿」早稲田大学オープンカレッジ、二〇〇八年、一ページ。
- (5) 高橋、前掲書、六ページ。
- (6) 安宅峯子「江戸の宿場町新宿」同成社二〇〇四年、四八ページ。
- (7) 高橋、前掲書、六ページ。
- (8) 安宅、前掲書、五七ページ。
- (9) 野村、前掲書、九二ページ。
- (10) 野村、同書、四〇ページ。
- (11) 野村、同書、四〇ページ。
- (12) 高橋、前掲書、一二ページ。
- (13) 田辺茂一「わが町新宿」旺文社、一九八一年。

## 新宿というトポスに関する研究

- (14) 野村敏雄『新宿っ子夜話』青蛙房、二〇〇二年、七ページ。
- (15) 安宅、前掲書、一七八ページ。
- (16) 中沢新一『アースダイバー』講談社、二〇〇五年、一五七ページ。
- (17) 安宅、前掲書、一八四ページ。
- (18) 山下実『都市の遺伝子』NIT出版、二〇〇五年、五六ページ。
- (19) 藤田寛『江戸』、吉川弘文館、一四六ページ。
- (20) 『読売新聞』二〇〇六年一月八日付。
- (21) 山口昌男『祝祭都市』岩波書店、一九八四年、二七一ページ。
- (22) 唐十郎、扇田昭彦『既成の枠を取り壊し、小劇場演劇が花開いた』『東京人』二〇〇五年七月号、一七七ページ。
- (23) 唐十郎『日本列島南下運動の黙示録』現代思想社、一九七二年。
- (24) 中沢、前掲書、四六ページ。
- (25) 吉見俊哉『都市のドラマトウルギー』弘文堂、一九八七年、二七〇ページ。
- (26) 中沢、前掲書、四七ページ。
- (27) 稲葉佳子『オオクボ都市の力』学芸出版、二〇〇八年、一五七ページ。
- (28) 『多文化共生のまちを目指す大久保』古今書院、二二五ページ。
- (29) 田中優子『江戸百夢』朝日新聞社、一七ページ。
- (30) 日高恒太郎『あなたの「街」はどこですか』『歌舞伎町ルネッサンス』の内側―『戦後社会風俗史』新人物往来社、二〇〇六年、九六ページ。